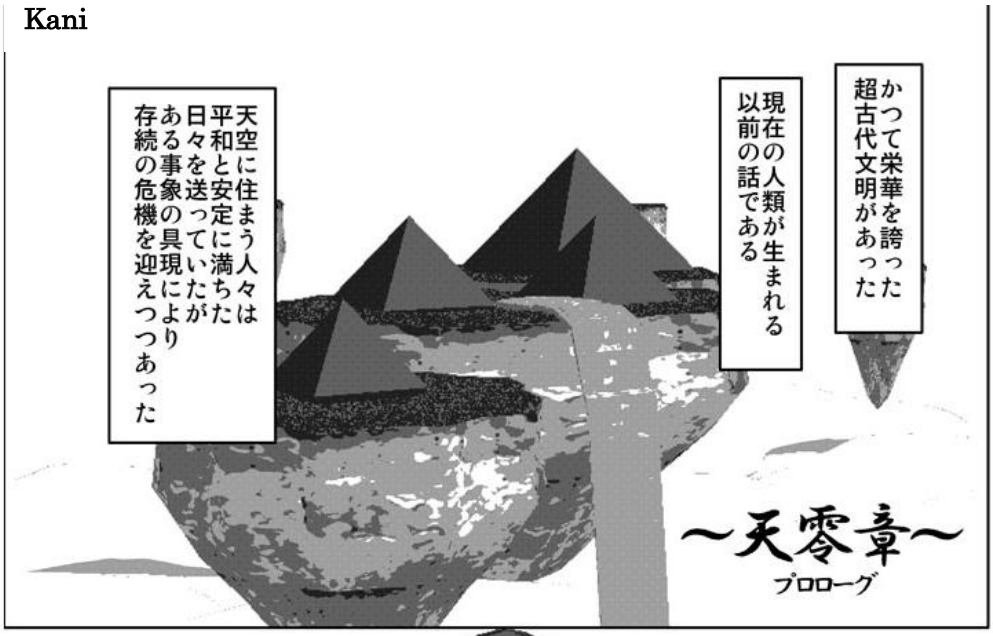
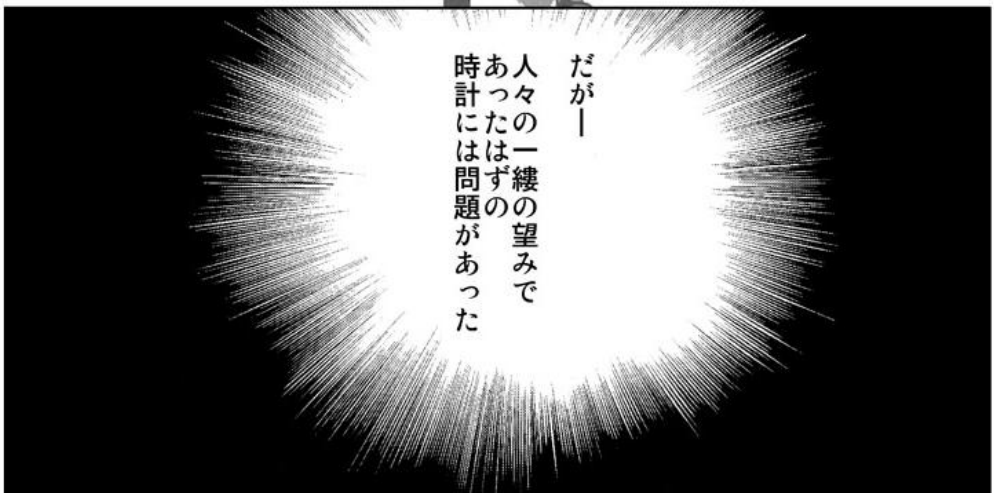
CREATE

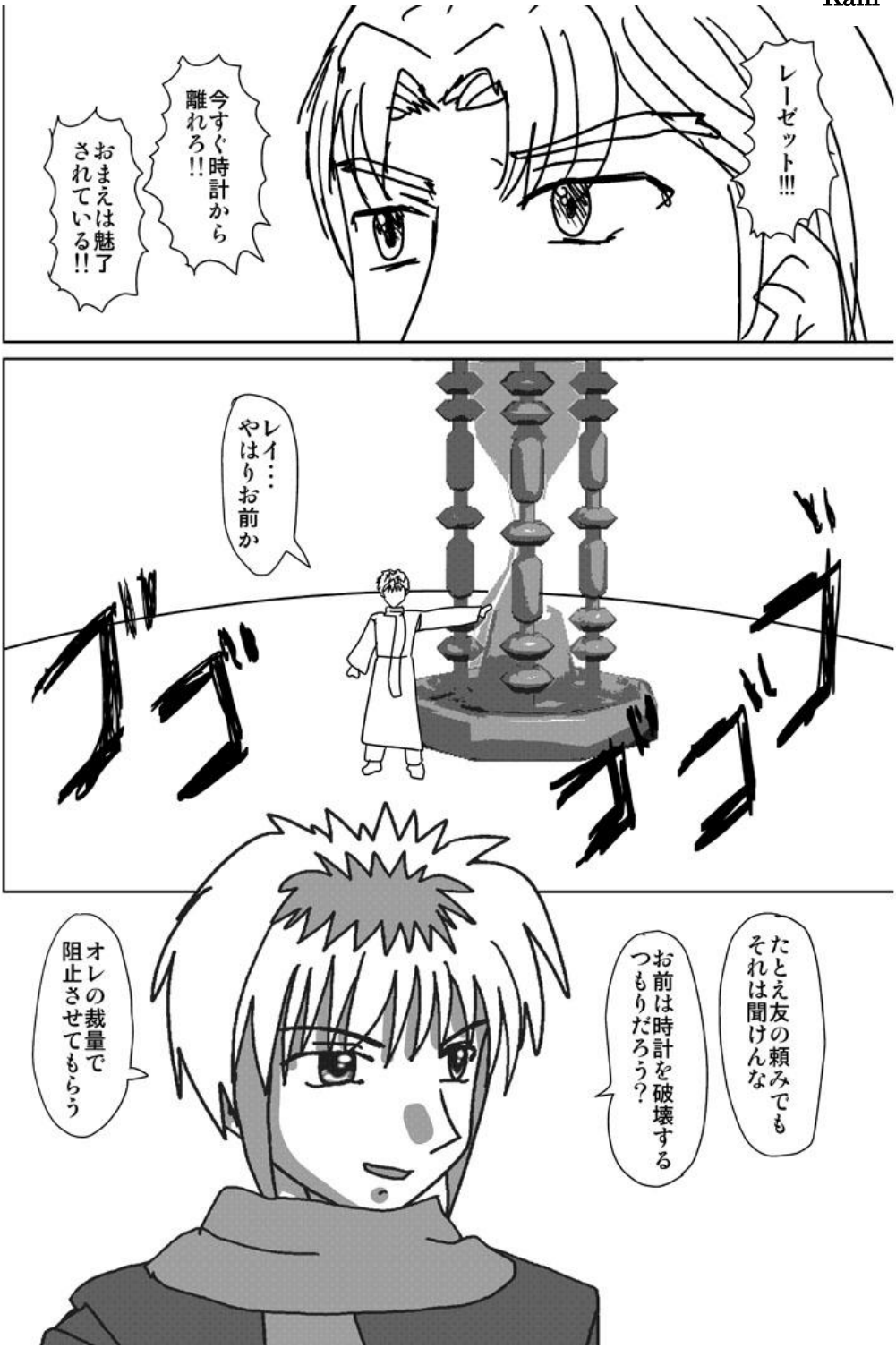
復活号

Kani


かつて栄華を誇った超古代文明があった
現在の人類が生まれる以前の話である
天空に住まう人々は平和と安定に満ちた日々を送っていたがある事象の具現により存続の危機を迎えつつあった
～天零章～
プロローグ

その危機を脱するべく錬金術士レーゼットが考案した飛躍的解決手段―
それは加速装置『時計』を使用した時空転移だった


だが―
人々の一縷の望みであったはずの時計には問題があった


レーゼット!!!
今すぐ時計から離れろ!!
おまえは魅了されている!!
レイ…やはりお前か
ゴゴゴゴ
たとえ友の頼みでもそれは聞けんな
お前は時計を破壊するつもりだろう?
オレの裁量で阻止させてもらう

シズク
奴を止めるぞ！
はい！
紫電よ!!!

レーゼット…
すまない…

…気にするな
こうするしかなかった
だが動き出した時計はもう止まらない

お前…!?正気に戻ったのか!?
レイ、後はお前に任せる…同胞の皆を頼んだぞ…

Kani

Kani

時計の暴走により
天の都は崩落し
加護は失われた

これより先
神の鼓動や吐息を
感じることも叶わず…

やがて…

地上に人類(ひと)の
時代が訪れたー

～天零章～
完

春のかすみ
田中

しぐれ恋四記

―夏の頁―

鈴神小鳥

―ナツツバキ、
僅か1日で落ちてしまう
愛らしい人よ

character

一年　時雨
（ヒトトセ　シグレ）

富士山　凪佐
（フジヤマ　ナギサ）

朱里
（アケサト）

神住　園
（カスミ　ソノ）

彼方　遥
（カナタ　ハルカ）

前回までのあらすじ

突然現れた謎の男”彼方 遥”
その正体は行方を眩ませていた
時雨の兄”一年 遥”であった。
彼の口にした「蛍」という少女
は一体？時雨に近づく彼の目的
とは、シリーズ5作目、過去編。

※全作春の頁下巻は諸事情により鈴神サイト内のみでご覧いただけます

鈴神小鳥

「しぐれ恋四記　―夏の頁―」

鈴神　小鳥

それは、幼い頃に聞かされた昔話の一つ。

――この村には鬼がいたんだ。可哀想な女鬼が。

そう語り始めたしわがれ声が、今でも耳に残っている。

姉と二人訪れた部屋。仄暗い室内と嗅ぎなれぬ線香の匂い。祖母の口から紡がれる物語は、日常を逸脱するものとして妙に記憶の奥深くに刻まれたものである。

＊＊＊

「恐ろしい」と感じることが無かったのは、語り手自身にその意図が無かったからなのか。女鬼の恋模様を交えた儚く切ない物語は、少しませた少女ふたりの心を擽るに十分であった。

――うちの庭にはナツ椿が植わっているだろう。あれが咲いた日だったそうよ。

――純白の椿、一日で堕ち朱く身を染める。

噂は自ずと耳に入る、それがただの言い伝えでないと知るのに時間はかからなかった。

『椿の家には、鬼が眠る』

「遥！　遥様待ってください」

炎天の空の下、私は駆ける。乱れた裾を少しばかり気にしながら、先ゆく背中を追って前へ、前へ。息が切れ、青白く透ける肌には汗が滲んでいた。

陽炎の先に目を凝らし探した彼の姿が、遠く霞んで見える。意識が遠のいた。突き刺さるような太陽の光は容赦がなく、みるみるうちに体力を奪われていく。

「……人でなし」

歩みは次第に遅くなっていき、しまいには本人には聞こえやしない悪態が漏れだしたころ。

遥がからかうような笑顔で私を振り返る。全て見透かされているようで悔しくて、そのままとぼとぼと彼の隣まで追いついた。

「……」

「ずいぶんとお早い到着で」

意地悪く笑う表情は容易に想像できる。なんだか悔しくなって、敢えてそれを確かめることはしなかった。

「気づかいのできない男はダメだってお姉さまが言っていたわ」

精一杯の対抗は空しく地面へ消えていく。

――ふわりと、髪に触れるものがあった。やはり、この男には敵わないのだと。私はつくづく思い知らされるのだ。

「怒っていらっしゃるのですか？　蛍様、可愛らしい顔が台無しだ」

頬が紅潮していくのが分かる。〝可愛い〟と言われたことに、〝蛍〟と呼ぶ声に。

――蛍子という名を蛍と愛称で呼ぶのは、この世で彼一人だけだった。彼の口から零れる特別な響きに、情けなくも翻弄される。

「からかわないで」と振り払う手、同時に彼の優しい眼差しに見つめられる。

「あぁ、失礼、怒った顔も愛らしかった」

彼の言葉ひとつに振り回され、顔を背ける。そうでもしなければ、心の中まで見透かされてしまいそうで。

「今日のこと、言いつけますから」

「ご随意にどうぞ」

――本来、許されるはずないのに。このような軟派な男と、目付け役の女中も付けることなく二人きりの帰り道。

生まれてこの方家柄をひけらかすような真似はしたことが無いが、これでもこの近辺では名の知れた家の娘。私が一言「無礼」と発すれば、否応なしに引きはがされて当然。

〝無礼者〟の名は一年（ひととせ）遥（はるか）。

由緒ある寺のお世嗣であることが、その言動を黙認される理由だろうか――否、私自身が本気で彼を怒るつもりが無いことは周知の事実であろう。

お家同士の古い歴史はよく分からないが、生まれた日から当然のように傍にいた彼を慕わないはずもない。家族同然、彼のことは兄のように思っていた。

「蛍（ほたる）様」

そういって片手を差し出す遥は、すっかり背丈が伸びて、今では見上げなければ目が合わないほど。それでも昔と変わらず接する彼を拒絶することは、逆に恥ずかしい事のような気がして。私は何も言わず、その手を取った。ごつごつした手。大人の男の人など、嫌でも思い知らされる。どうしようもなくむず痒かった。

「して、蛍様。儀式の準備は滞りなく？」

思わず足が止まる。心臓を握られたように、短く締め付ける小さな痛み。

「ええ、お姉さまも今朝から忙しそうにしていたわ。あとは椿を咲くのを待つばかり」

出来るだけ平静を装って、事実だけを伝えた。

椿鬼（つばき）の家に伝わる儀式、この家に伝わる宿命を明かされたのは、私の姉〝朱里（あ

けさと）〝が十六を迎えた先月の朝のことであった。

「ナツツバキ、僅か1日で落ちてしまう愛らしい人よ……」

いつか聞いた物語の一節がふと頭をよぎった。

＊　＊　＊

「婚約、ですか」

屋敷の主である祖母は、神妙な面持ちで頷く。重い空気が流れる。遥を連れて戻った家、切り出された〝大切な話〟。所詮無関係の私はただ、畳の目を数える。

「左様、あの儀式の意味するところは主も知っておろう」

「……」

冷たく鼻で笑ってのける。遥に向けられる、怪訝な視線。

「いつまでも古いしがらみに囚われ続得るのはいかがなものか」

「それを持っての平穏ぞ」

これ以上の口答えを許さぬと言わんばかりに、間髪いれず続ける祖母。

「儀式は椿の咲いたその日、時を待たずして執り行う。夏椿は咲いたその日の日暮れには散ってしまう……猶予はないよ」

「心を決めておきなさい」

その時、心臓が大きく跳ねた。〝祖母は私に言ったのだ〟と否応でも理解させられたからだ。私を迎えに行かせた意味も、この場に留まらせた意味も。途端頬が高揚し、私は逃げるように部屋を飛び出した。

（嫌い、嫌いよ。おばあさまも遥も、皆……）

廊下をパタパタと駆けた先で、見慣れた影に足を止める。

「お姉ちゃん」

姉は何も言わず、手招く。か細い指で私の手首を緩く掴んで、すぐ隣の彼女の部屋へ。

「……」

姉は再度部屋の外を確認し、そっと障子を閉めた。このように些細な動作さえ、彼女には無駄がなく、美しい。一年の家に嫁ぐものとして申し分ない自慢の姉、朱里（あけさと）。今はそれがどうしようもなく憎くて、自分の拳に爪を立てた。

「……蛍子（けいこ）、大丈夫よ」

私の名を呼ぶ大好きな朱里（あけさと）お姉様、私の両手をとって、心配そうにのぞき込む。姉には

きっと理由を知られているから、顔見られるのが気恥ずかしかった。

「耳を貸して」

囁くような声で私の耳に唇を寄せる。

「え……？」

彼女の言葉に私は言葉を失った・

――蛍子（けいこ）、変わりましょう。

＊　＊　＊

やけに涼しい朝だった。開けた瞼の隙間から、障子こしの柔らかい光が差し込む。

薄ぼんやりとした意識のなかで、〝咲いた〟と。外から漏れ聞こえたその一語に、瞼をピクリと震わせる。

（ついに）

せめて心を落ち着けこの部屋を出ようと、深く長い息を吐いた。私は何も聞いていなかった。姉のもくろみも、その算段も。「私、他に好きな人がいるの」と悪戯っぽく笑う彼女の提案を、どう受け止めるべきか分からず、あの場はお茶を濁して部屋へ戻った。

ひんやりとした畳の上。つま先を引きずるように、静かに立ち上がる。外はもう騒がし

く、準備を進める女どもの足音がパタパタと響いていた。

「蛍子（けいこ）様」

ちょうど部屋を出たところ、声がかかる。

困り顔の使用人が、私のもとへ駆け寄った。

「おはよう、何かあったの？」

「椿が……椿の花が咲いて…」

「ええ聞いたわ、それで儀式はいつ？」

「……それが」

言いづらそうに口を噤む。やはり、姉が何かしたのだろうかと、一抹の不安がよぎる。

「お姉さまは今どこに」

「――お部屋です」

急く気持ちを抑えて、早足で姉の元へと向かう。「お姉さま」と声をかけるや否や、その戸を大きく開いた。

「何のつもりです、お姉様」

「……」

蒲団の上、静かに横たわる姉に苛立ちを覚え、かけていた布を引きはがす。

「きゃッ」

思わず悲鳴が漏れた。姉の白い首元に大きく広がる黒い跡に、思わず後ずさる。

「蛍子様？」

部屋の外で待っていた使用人が心配そうにこちらに近づき、同様に声を上げる。

「ご、ご主人様に伝えてきます」
そう言って慌てて部屋を出て行った。残された私と姉は静寂の中で、ふたり。少しずつ冷静さが戻ると、姉の身体に膝を寄せるように腰を下ろした。
「お姉様」
だらりと下ろした私の指に、柔らかな感触が触れる。姉の白い指が、私の指の先をつかんで握っていた。私は深く長い息を吐きす。
「ふざけるのはお辞めになって、お姉様」
私の言葉に応えるように、控えめな唇が静かに弧を描いて、ゆっくりと瞳が開かれる。
「どういうことか説明してください」
「あなたがずっと遥様を想っていること、私が知らないと思った？」
優しい姉のことだ。私に気を利かせてのことだと想像はついていた――けれど、私はもう幼い子供ではない。
「ありがとう。でも、婚約はもう決まったことよ、役目を果たして」
姉は眉をしかめて、私の目を見つめる。
「……蛍子はそれでいいの？」
咄嗟に言葉が出なかった。着物の裾を握る手が僅かに汗ばむ。
「――お二人で何のお話合いかな」

突然の声に驚き振り返ると、こちらに背を向け障子に映る遥（想い人）の姿があった。まさか聞かれていたのではと鼓動が速くなる。

「いえ、遥様。お姉様がふざけただけです」

遥はいつもと変わらぬ様子で、私たち姉妹のいる部屋へと入った。火照る頬に気づかれぬよう、できるだけ平静を装う。

「遥様」

何か言いたげな姉を、首を横に振り制止する。もう、これ以上は――

「蛍子、朱里。何の騒ぎだい」

遠くからの声。開きばなしの障子から、使用人が祖母を引き連れて来るのが見えた。そちらに気を取られていた私は、突然引き寄せられた腕に驚いて目を見開く。

「――ッ！」

それが遥だと気付いた時には、その唇が耳元にあった。

「――駆け落ちしようか、蛍（ほたる）」

その瞬間に、頭の中が真っ白になった。遥の唇が少し耳に触れて、掴まれていた腕の力が緩む。祖母から死角になる位置で、私は立ち尽くすしかなかった。

「あぁ、遥。お主もおったか」

祖母が部屋に入り、姉のほうへ視線を落とす。既に使用人から話は聞いているのであろ

う、姉の作った〝偽の痣〟を見て「これは」と手を伸ばす。恐らく墨で跡をつけただけの痣は、触れられると直ぐに落ちてしまうのだろう。慌てた姉が腕を払おうとする前に、何故か遥が「触るな」と声をあげた。

「鬼の呪詛かもしれません、安易に触れるのは危険です。

遥の勢いに押されるように、祖母が後ずさる。使用人がそっとその背中を支えた。

「ま、まさか、」

みるみる血の気が引いたように青ざめていく祖母は、使用人の腕を支えにして私たちに背中を向けた。

「……蛍子、すぐに儀式の準備をなさい」

「お祖母さま？！」

祖母がそれ以上のことを語ることはなく、部屋の外へ向かってふらふらと歩きだす。

「朱里は部屋から出てはならない、いいね」

静かに障子の閉まる音が響いて、祖母らの影がゆっくりと消えていくのを眺めていた。

「さぁ、どういうことだろうね」

「分からないわ、でも……」

姉が私の手を取って、ほほ笑みかける。

「これであなたが、正式に遥さんの婚約者」

「そんな、勝手なこと言わないで！」

思わず私は声を荒げる。私にはこの家を、この呪われたしきたりを破ることの責任を負うことができないと。

「鬼がどうしたというのだ」

「きゃっ」

突然に身体が宙に浮いて、私は遥の身体にしがみついた。抱き上げられたと気付いた時には遥の顔が、長いまつ毛が、目の前にあって、逸らすことも許されない。

「蛍様。お慕いしておりました、ずっとずっと前から」

夢か真か。遥の瞳が、情けない表情の私を愛おしげに見つめる。

「蛍様」

私の名を呼ぶ、愛しい人。

「蛍……蛍子どうかお返事を」

「私もよ……」

絞り出すように出したその言葉が、私の精一杯だった。

＊　＊　＊

生憎の雨の中、儀式は執り行われた。地元の民の祭りとして扱われるこの儀式。参列者はちらほらと目に入ったものの、女鬼を演じるのがだれであろうと気にする者はいない。

一部、椿鬼の家と関わりがある者が、こそこそと噂話をするのが聞こえた。

形式的に段取りをこなすだけの行事は、問題なく終わる。

多少の疲労感とともに、ふらふらと寝床に入る。遥様、遥様。私めは幸せにございます。遠くなる意識。遠く遠く、もう戻ることのない意識を私は手放した。

ばしりすく

]

あと寿命が1ヶ月と言われたら、君はどうする？

きっと取り乱して、何も終えないままこの世を去ることだろう

あと寿命が半年と言われたら、君はどうする？

きっと心残りを少しだけ減らして、未練がましくこの世を去ることだろう

あと寿命が1年と言われたら、君はどうする？

きっとみんなにお別れを告げて、満足したフリをしてこの世を去ることだろう

あと寿命が2年と言われたら、君はどうする？

きっと何か一つ成し遂げようとして、後悔を抱えたままこの世を去ることだろう

あと寿命が5年と言われたら、君はどうする？

きっと少し悲嘆に暮れて、それからゆったりこの世を去ることだろう

あと寿命が10年と言われたら、君はどうする？

きっといつも通りの日々を過ごして、気づかぬうちにこの世を去ることだろう

寿命は誰にでも等しく訪れるもの

いつやってくるかわからない迎えに怯えるよりも

明日が終点な気持ちで過ごす

そしたらきっとあの世で

分厚い思い出のアルバムが待っていることだろう

人として生きるって

罪を重ねることだ

人間なんていなくても

地球は廻るし

時は流れる

それ以上に

生きとし生けるものを殺し

地球を破壊へ導き

意味なんてないのにのうのうと

王者を気取って食いつぶす

人として生きるって

罪を重ねることだ

けれども、それでも

私はこの世界に

人間として生まれて

よかったと思う

命は尊いという

大概"人の"と付くけれど

命は尊いという

大概"説教"の常套句だけれど

命は尊いという

大概"死ね"はあいさつ代わりだけれど

命は尊いという

大概"いただきます"は言わなくなってゆくけれど

命は尊いという

それが言葉だけではない生き方をしたい

お久しぶりです、かにです。部誌復活ということで寄稿させて頂きました～。

このところ漫画を描いていなかったので、今はこのクオリティが限界です。すいません。
男キャラを描いたのも久しぶりでした。

内容の解説をすると、この天零章は私が１２歳ごろにサウンドノベルツクールで作っていた話です。
話の内容自体はさほど面白いものではないですが、設定的にはかなり重要な作品です。
私が制作したゲームや他のシリーズにも深い関わりがあるので、僅か６Ｐとはいえこの中に重要な要素が詰まっています。

レイの妹シズクは、幾つかのゲームでクリア後の隠しダンジョンなどで加入するキャラとして登場します。『裏ボスキラー』とて名高く、ステータスは高いです。
紫電の雷は雷属性最強系の魔法で覚えるキャラは少ないですが、威力はかなり高い。
レイさんは魔法防御が高いので大丈夫でしたが、一般人はかすっただけで死にますね(苦笑)
刺されたレーゼットさんは他のシリーズに名前を変えて登場します。記憶は失ってますが。
レイとの再会シーンは見物。(バトルですが)
最後の割れた髪飾りは、旅シリーズで登場します。とある二人のキャラが髪につけてます。

とまあ、こんな感じで設定が盛りだくさん。
時系列では最初期になるこの読み切りをきっかけに、私の他の作品への理解の入口にでもなれば幸いです。

天の民の生き残りはその後どうなったのか？　→旅シリーズへ
危機的な現象の具現とは一体なんだったのか？　→旅シリーズ＆エターナルシリーズへ
レイやレーゼットはその後どうなったのか？　→柳田シリーズへ
なぜレーゼットは時計に魅了されたのか？　魅了とはなんなのか？　→ＭＡＸシリーズへ
レイの妹のシズクはその後どうなったのか？　→旅シリーズへ
地割れに巻き込まれて落下した女の子は誰？　→エターナルシリーズへ

ではでは、いつかまたお会いしましょう。

かに

かに

春のからす
ふりーとーく
←十種国鷹
国宝と呼ばれる
ほどの一振り。
人間的な生活を
送るのが苦手だが
悪くはないと
思っている。
七月とは幼馴染で
主としている。
まにあわないかと思った……(;゜ロ゜)
どうもそらを改め田中です。おとな高校創作部復活おめでとうございます！！！
今回から私もお手伝いすることになったので、頑張っていきます(・ω・)
今回はイラストで参加でした。時間的に小説も漫画も厳しかったのです……orz
「春のからす」という創作を少し前に考えて、本格的に考えてみるかーと思ったのもあり、ちょっとこう……イメージイラストみたいなのにしてみました。
楽しかった……構想自体は前からあったけどキャラデザ云々は全部モスバーガーで決めました。なのでこのキャラ達はモス産です。
では、次回また！
田中
夜霧初音→
親がおらず、
親戚中をたらい
回しにされている
普段はビクビクしながら
暮らす少女だが、
あるきっかけで二人と関わり
武器としての立ち振る舞いを
するようになる。
↑七月命
三大名家の一つ・七月の子。
立場上心を開ける人間が
少ないが、国鷹と初音には
心を開く。
国鷹には馬鹿にされ、
初音にはかわいそうな目で
見られることも多いが
心のうちにも、生い立ちにも
闇があふれている。

Free Talk

お久しぶりです。で、良いでしょうか？
まずは”おとな高校創作部”復活
おめでとうございます!!! パフパフ

初めましての方初めまして、
以前から引き続いてご覧
いただいている方は
ありがとうございます!!

私、鈴神もまたしぐ恋で
参加させていただきます

前話　春の頁　は
サイトのみの公開と
なっておりますので
その他過去作と合わせて
ぜひご覧ください。

また、
【しぐ恋ゲーム化企画】
絶賛始動中ですので
よろしくお願いします！

進捗はTwitterにて。

すずかみ　　ことり
鈴神 小鳥

復刊おめでとうございます！

こんにちは
お久しぶり？です
何を書いたらって感じですが…

まず、復刊おめでとうございます
そして復刊のために動いてくださっていた
部長さん、副部長さんありがとうございます

バタバタとした時期で
今回はイラスト1枚になってしまいました…
うーん、悔しい限り…
次回は時間があれば頑張りたいです
それでは

はじめまして！此花 蛍です。
お絵かきが出来ないので、文字ばっかりですみません。

初掲載でとてもワクワクしています。
普段は詩ばかり書いているので、ホントは小説に挑戦する予定だったのですが。
時間が取れなかったので今回は手抜きしちゃいました m(_ _)m
次回はもう少し余裕をもって、新しいことにチャレンジしたいです。

最後にプチ宣伝。
エブリスタで執筆しているので、興味が湧いたらぜひ読みに来てください！
エッセイもどきもあります ///

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
またお会いできることを楽しみにしています。